Erich S. Gruen,

Heritage and Hellenism: The Reinvention of Jewish Tradition,

(Hellenistic Culture and Society 30)

California: University of California Press, 1998, pp. xx+335.

井 上 ^{*}
INOUE Hazime

本書の内容

PREFACE, pp. ix-xii.

INTRODUCTION, pp. xiii-xx.

1. Hellenism and the Hasmonaeans, pp. 1-40.
2. The Use and Abuse of the Exodus Story, pp. 41-72.
3. The Hellenistic Image of Joseph, pp. 73-109.
4. Scriptural Stories in new Guise, pp. 110-136.
5. Embellishment and Invention, pp. 137-188.
6. Kings and Jews, pp. 189-245.
7. Pride and Precedence, pp. 246-291.
8. Conclusion, pp. 292-298.

ABBREVIATION, pp. 299-300.

BIBLIOGRAPHY, pp. 301-320.

INDEX, pp. 321-335.

I. 本文にはいる前に。序文と序章に見る著者の意図。

序文によれば、著者エリック・グリュエンは、本著発行時点でカリフォルニア大学バークレー校の歴史学・古典学教授である。1993年、ユダヤ史の文化的アイデンティティにヘレニズムが新しい形を与えた役割を研究するため多重文化研究 (multicultural studies) を呼び掛け、多くの賛同を得た。何人かのイスラエルの学者からは「リベラル、セクラーなディアスポラ・ユダヤ人の藐視の視角」と非難されたが、1996年1月から6月までイェルサレム・ヘブライ大学客員研究員としてイスラエルの研究者と交流 (『オ

* 本学会正会員

Member, Soicety for Near Eastern Studies in Japan

リエント』41/1 (1998):163-168 に挙げた Bar-Kochva も含まれる), 本書の完成を見たと言う。以上の序文からは著者の柔軟で且つ強い信念の学風が読者に伝わる。

才気に満ちた長文の序章は以下の3点に要約出来よう。

(1)ユダイズムとヘレニズムとは、時空を確定出来ない文化変容の中であって、対抗する体系でも、両立しない概念でもない。

(2)ヘレニズムとはアレクサンドロス大王以後の地中海諸社会の融合体である。そのなかで、ユダヤ人はギリシア文化への降伏か抵抗かの選択に直面したわけではなく、ユダヤ人がギリシア的環境の中で、彼等の過去をギリシア語、ギリシア文学というメディアにより再生させ、文化的自己定義を発展させた。これがユダイズムである。

(3)ギリシア語で書かれたヘレニズム・ユダヤ文学の研究では、歴史 (history) と伝承 (legend) は明確に分けることは出来ず、諸種のテキストが何時、どこで、何のために、誰によって作られたかよりも、それらが時代を越えて読まれ、拡がった事実が問題なのである。

II. 各論文へのコメント (紙面の関係から本著書のページ、および史料の章、節の区分は、特に必要な場合を除き省略する)。

第1論文の、ユダ・マカバイオスの反乱 (前167年) が、ユダイズムとヘレニズムの対決の回転軸であったとする見解 (1990年代にも “Kulturkampf” という用語を使った業績があることが紹介される) への著者の反論は、セレウコス王家 (あるいはむしろプトレマイオス王家をも抱摂して) とユダヤとの関係が、王家からすると、地方権力者としての大祭司職へのパトロネージであり、ユダ・マカバイオスとハスモン家もその線歩んだ事に重点を置く。マカバイ反乱とは「異常な例外」とも言うべき、前167年のアンティオコス・エピファネスの王令の実施に対する暴発である。その後のハスモン家の歴史の詳細については、セレウコス王家ないしその將軍との「相互依存」(reciprocity) 関係と、ハスモン家の攻撃目標が周辺異民族、もしくは背教者で、ヘレニズムあるいはヘレナイザーではなかったという指摘 (『マカバイ記1』[以下 1M.] 2.44 ff.) をあげるに止める。前142年ユダの兄シモンの大祭司を兼ねた指導権把握が決定的となったことを示す「青銅文書」にも、セレウコス王家からの独立は明言されない (1M. 14.27-45)⁽¹⁾。シモンから2代目のアリストブロスは「ユダヤ人でバビロンから帰って初めて王を称した」とヨセフスの言う人物で、また「ギリシア好み」とも呼ばれている (ヨセフス『ユダヤ古代誌』[以下 Jos. Ant.] 13.318)。著者は、ヨセフスにはハスモン家がユダヤ独立体制を作った事とヘレニズム化とは矛盾とは思われなかったと言い、更にギリシア語・ヘブライ語双方の銘を持つ貨幣の存在などから、ユダヤ人の伝統の中にギリシア人の生活様式が吸収

されたと考え、ユダ・マカバイオスの反乱はユダヤ人を信仰に奮い立たせたが、ヘレニズムの痕跡を排除したわけではなく、ハスモン王朝の成功はディアスポラにもパレスティナのヘレニズム化ユダヤ人にも彼等の創造的エネルギーへの刺激を与え、ユダヤ人の自己イメージを作り替えさせた事と結ぶ (p. 39 f.)。

第1論文の、セレウコス家とハスモン家の間の「歴史」史料解釈の補遺に、第7論文「自負と優位」での「伝承」史料の解釈を置く。ユダを継いだ弟ヨナタンが前144年スパルタとの同盟「更新」のため送ったと言われる書簡 (1M. 12.5-23) ではユダヤ人とスパルタ人は「兄弟」^{アデルフォイ}であると言われ、さらにユダヤ人がスパルタ人の恩恵者の立場に立って書かれているから、著者はこのユダヤ・スパルタ関係のユダヤ中心的 (Judeo-centric) な立場は、ユダイズムがヘレニズムを「同化」(assimilate) した象徴と考える (pp. 260-(2) 66)。ユダ・マカバイオス、ハスモン家がヘレニズムと「相互依存」関係にあり、これを敵としなかったとすれば、彼等の敵とは誰か。それはこの著書の初めに言及される「周辺諸民族」^{エトネー} (『マカバイ記2』[以下 2M.] 8.9 等) である。著者は淡々と史料を集積して、彼等は結局ハスモン家支配に組み込まれてしまう状況を指摘はするが、判決はしない (p. 24 ff.)。

アンティオコス・エピファネスの対ユダヤ教政策、ハスモン家の家系、ユダヤ諸宗派などの問題が残るであろうが、著者は標題「ヘレニズムとハスモン家の人々」を語ったと答えるかもしれない。

第2論文は、ヘレニズム時代ギリシア人、エジプト人に伝えられた「出エジプト」物語を「アンティ・セミティズム」の見地から捉える見解への反論である。

彼は次のように言う。ユダヤ民族の Origo である「出エジプト」伝承 (ヘカタイオス、ポムベリオス・トログスなどに伝えられる) をエジプトのディアスポラが脚色して、それをエジプト土着の物語 (fable) に浸透させて、出エジプトに先立つ「ユダヤ人のエジプト支配」の物語 (ヨセフス『アピオンへの反論』[以下 Jos. C. A.] 1.230-51. マネトーンの名で伝えられる) を創作したのである。著者は第8論文「結論」において、エジプト・ディアスポラが法的地位確保のために『出エジプト』のヘブライ人の地位を征服者に修正したと言う (p. 293)。「出エジプト」物語を『出エジプト記』そのままではなく、異邦人の伝承、ディアスポラの手も加わった (Origo の Use に対する Abuse) と、「多重文化的解釈」を敢えてする (p. 71 f.) 著者に、1993年の彼の提言にイスラエルの学者が放った「藪咲みの視角」との批判の当否を考えるべきであろう。

第3論文では『創世記』のヨセフの二面性を説くフィロンの作品も取り上げられるが、次のヘレニズム時代の伝承を見るに止める。やはりヨセフの名を持つ人物として、プトレマイオス5世に仕えた徴税請負人、ヨセフス (Jos. Ant. 12.154-236. cf. 2M. 3.11) に

伝えられる、トビア家のヨセフと、後にヨルダンの東の豪族として現われる、その子ヒュルカノスの物語には、多くの歴史的根拠が考えられるが、著者はこの話はフォークロアであるとする⁽³⁾。根拠は『創世記』のヨセフとトビア家のヨセフ、ヒュルカノスとは細かい点では似ているが、トビア家の物語にはモラルが無い事だが、人物はネガティブに決め付けられていない。この物語は第6論文でも扱われる。著者はそこでは、王位を占めるプトレマイオスの成功にはユダヤ人（徴税請負人、大土地所有者）の信頼に拠っていたとの意味が含まれると言う。第1論文の際言ったことだが、ヘレニズム王朝とユダヤ人との相互依存には第三者の犠牲がある。ここではトビア家のヨセフによる兵力を用いての暴力的とも言える徴税が語られるが、これがまさに『創世記』のヨセフの二面性のうち、専制王国の政策実施者としての苛斂誅求ぶりを映す。著者は、トビア家のヨセフ・ヒュルカノス父子のアネクドートを検討しながら、権力者プトレマイオスを愚弄する、グロテスクなユダヤ的機知に触れるのを忘れない（p. 240）。

第4論文、第5論文を通じて、著者はヘレニズム時代ユダヤ文学のスタイルが、モーセを主人公としたギリシア悲劇風作品など、ギリシア文学のジャンルを借りた旧約物語の書き替えから、モーセその他、旧約物語のヒーローたちをギリシア・地中海諸地域文化の創始者とする同化発展の過程を考察して、第7論文では「律法」がギリシア哲学に先行するユダヤ文学作品を示す（p. 246 ff.）。『ダニエル書』等大衆的な物も忘れない。

第6論文「王とユダヤ人」は、この著書の中で最も長編である。「王とユダヤ人」と言っても、王はアレクサンドロス以外はプトレマイオス家6代の王であり、著者は1人1人について、その史料を、歴史と伝承の両面から冷静に分析して、これらは学説史的にも重要であるが、数例をあげるに止めざるを得ない。注意すべきは、神の権威とユダヤ人の信仰が、王の権力に対して結局は勝利する場合も（後述のアレクサンドロス。『マカバイ記3』のプトレマイオス4世は省略）、あるいは王がユダヤ人に翻弄される場合も（後述のプトレマイオス2世。同5世は前述トビア家の物語の際語られる）、王の性格・行動が伝承ごとに特徴的に描かれていることの指摘である。

アレクサンドロスの場合、イエルサレムに行進する途中、大祭司に会って『ダニエル書』を見せられて勝利を確信、ユダヤ人に特権を与えたとヨセフスは言う（Jos. Ant. 11.326-339. ユダヤ人の信仰については、Jos. C. A. 1.192）。著者は『ダニエル書』云々については「ユダヤ人の神がアポロンやアモンの代わりとなった、ヘレニズム的テーマの最大の盗用」と言う（p. 196）。

プトレマイオス2世には彼が『70人訳』成立を促したことを伝える『アリストテラス書簡』（以下L.A.）がある。L.A.の伝えるプトレマイオス2世は絶対権力の保持者であるが、「律法」の信奉者として、聖書へのプロスキュネーシスを行うなど、戯画化される。

著者によれば、通説のように『アリストエラス書簡』がユダイズムとヘレニズムの統合を促したと言う事は適切でない。ギリシアの学問に通暁し、『70人訳』遂行のため、学者派遣に同意したエルサレム大祭司エレアゼルはユダヤの宗教の特質を説き、王と問答する学者たちの答えは、表面は哲学的であるが、最高権威としての神に言及する (L.A.⁽⁴⁾ 140)。また著者は『アリストエラス書簡』について、諸文献が触れていないのはユーモアだとして、王の戯画化や、エレアゼルが偶像崇拜を冷笑したことへのユダヤ人読者の喜びを考える (p. 218)。

ヘレニズム君主の行動に題材を取ったユダヤ文学は、背後に旧約の「宮廷のユダヤ人」モチーフの系譜を持つが、ヘレニズム文化とユダヤ人社会の関与と反映を示すと言う。プトレマイオス家とユダヤ人との出会いが多いのは、セレウコス家はハスモン時代のユダヤ人には愉快でなかったからだと考える (ヨセフスはセレウコス1世からアンティオコス3世に至る王がユダヤ人に与えた特権を詳述してはいる)。「伝承」のテーマは、ヘレニズム王朝体制に対するユダヤ人の忠誠とその反対給付としての信仰の確保であり、政治的には無力だが、才覚では王に勝るユダヤ人のアネクドットがコミック・タッチで取り上げられ、アイロニーで味つけされ、読者にユダヤ人の遺産 (heritage) への誇りを与えたのであると著者は評価する (p. 243 ff.)。

第7論文「自負と優位」は、ヘレニズム時代ユダヤ人のアイデンティティ完成への考察で、ユダヤ人の優位の例は第1論文への補遺で既に見た。そのクライマックスが「黙示」である。ユダヤ人が異教徒の宗教を借りて自分たちの信仰、また民族の優秀さを提示した、『シビュラ託宣』特に『第3シビュラ託宣』(以下 S.O. 3) が取り上げられる⁽⁵⁾。従来論ぜられて来たテーマの1例、歴史的指針 (ローマの抑圧がプトレマイオス家の7番目の王まで続くという句。S.O. 3.191-93) などを詳細に検討して著者自身の見解を展開する。問題は黙示的予言の中にあり、7番目の王は誰かというような狭隘な政治的解釈は単純であるとして、著者は『シビュラの託宣』とは、ローマに搾取された「東方の恨み」がローマの「支配」(empire) の崩壊した後の幸福な時代を予想して (p. 281)、ローマの悪はその支配力にも拘らず最高存在に破壊されるという句をあげ (S.O. 3.46-62. p. 286)、この反ローマの線はギリシア人から受け入れられたもので、『第三シビュラ』は時空を超越してギリシア人とユダヤ人の結合を断言し、ユダヤ人の優位を再確認するものであって、光を見たギリシア人たちに将来の栄光を分つとも言う (p. 289 f.)。

著者は「ユダヤ人のそのパートナー (ギリシア人) への優越、ユダヤ人の救済、勝利の予告」がギリシア語で書かれたことを繰り返し述べて、その聴衆が喜んで聞いただろうとする結論の一節は、民族固有の問題を重く受けとめながら、様々に対処したヘレニズム時代のユダヤ人と、多重文化研究を自らに課した著者を重ねて見ることが、許され

るのでなかろうか。

第8論文「結論」は上記各論文の再発展を期した要約と言える。最後に著者は、ヘレニズム・ユダヤ文学の読者、聴衆については十分にわかっているとは言えないが、聖書の翻案、ヘレニズムの歴史の書き替えが、読者にユダヤの遺産への誇り、新しい表現での楽しみを与えたと結ぶのが、アイロニーとユーモアを唱える彼らしい。

III. 結語に代えて

評者がヘレニズム時代のユダヤの歴史に触れたのは今から30余年前であり、グリュエンの著書を発行の暫く後に知ったのは偶然に過ぎない。この間我々の学界においても斯学への注目はあつたが、不十分ながらグリュエンの著書の紹介を試みたのは、著者の史料的にも方法的にも包括的な業績が、新しいユダイズム研究の道を示すことを感ずるからであり、気鋭の士の思いを聞きたいからである。

注

- (1) 井上一「マカビ戦争」『古代史講座』11, 学生社, 1965, p. 76; 小川英男, 山本由美子『オリエント世界の発展』世界の歴史4, 中央公論社, 1997, p. 220; 高橋正男『死海文書』, 講談社, 1998, p. 91. 高橋氏は世襲体制成立が史料にある所から「独立」の言葉を使う。なおユダを継いだヨナタンが「悪の司祭」とよばれたことについては、高橋, p. 159.
- (2) 著者はしかし 1M. にスパルタ・ユダヤ「同盟」と共に述べられるユダヤとローマとの同盟については否定することはない。Cf. Gruen, *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, Vol. 1, Berkley, 1984, p. 43 ff.; 吉村忠典『支配の天才ローマ人』三省堂, 1981, p. 179. グリュエンの著は吉村氏の教示による。ユダヤ・スパルタ関係のヘレニズム史を通しての詳細な検討は Gruen, *Heritage*, pp. 254-268. ユダヤ人とスパルタ人との同族関係を、Bickerman は “ticket of admission to the Hellenic club” と捉える (E. Bickerman, *The Jews in the Greek Age*, Cambridge, 1988; Gruen, *Heritage*, p. 266, n. 90)。しかし著者はピカーマンの通りとすれば両民族の祖先はギリシアのヘロスでなければならない。アブラハムが共通の祖先になったことは (1M. 12.21), ユダヤ人がギリシア人を同化したものだという。
- (3) Gruen, *Heritage*, pp. 99-106. p. 103 以下にはトビア家についての文献 (旧約『ネヘミア記』の記事などを含む) と、それに符合する遺跡、碑文・パピルス文書史料が注として詳細に述べられる。そこに報告される Araq el Emil 遺跡については、大戸千之『ヘレニズムとオリエント』ミネルヴァ書房, 1992, pp. 308-316 に詳しい。ともあれ文献以外の史料は認めるものの、著者は「トビア家伝説」とは族長ヨセフのイメージを思わせると言う。Gruen, *Heritage*, p. 106.

- (4) 拙稿「いわゆる『アリストテース書簡』における王権論について」(秀村欣二, 三浦一郎, 太田秀通編『古典古代の社会と思想』岩波書店, 1969) は「フィラントロピア」をキーワードにして, これが王権のギリシア的・ユダヤ的实践倫理を説くものと考えた。
- (5) シビュラの出自については例えば, パウサニアス『ギリシア案内記』12/1-9 (馬場恵二訳, 岩波書店, 1992, pp. 220-224)。